

Y12b      サイエンス・コミュニケーションの新展開・文理融合的アプローチ ～ アニメーション「元素くんの旅」からの試み

川越至桜（総研大・天文科学）、松岡葉月（総研大・日本歴史研究）、日下部展彦、小池一隆（総研大・天文科学）、立田委久子（総研大・生命共生体進化学）、稲見華恵（総研大・宇宙科学）

教育をする上で理科系・文科系と分類されることが多いが、両者は完全に分離できるものではなく、両方の要素が含まれている文理融合の分野も存在する。この文理を融合させることにより、それまで分化され各々の分野内だけで理解していたものが総合的に理解されるようになることを期待し、「最先端科学と社会の接合」をテーマに総合科学的観点からの企画展に対する見学支援のための視聴覚教材を提案した。

「元素くんの旅」と名付けられたそのアニメーションは、炭素 14 が主役である。炭素 14 は、理化学分野との共同研究による考古学の先進的分野に取り入れられている。星の中で生成された元素が超新星爆発等でまき散らされ、それらをもとに地球が作られる。そして、その地球上で炭素 14 が生成され、その炭素 14 が考古的遺物にどのように残留し、現代の考古学の研究に、どのように取り入れられているのか、その一通りの過程をアニメーションで表現した。このアニメーションは現在、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館の博物館事業課サービス・普及係の管理下において高校生対応の教材として適正かどうか、モニター調査を踏まえて検討中であり、高校生の男女、理系文系ともにアニメーションに関するアンケートや感想を集めた。

本年回では、この「元素くんの旅」の紹介、およびその有用性等をアンケート結果を通して議論する。